

家なき作家 —ヘミングウェイ—

安井信子

A Writer without Home

— A Study on the Home in Hemingway's Works —

Nobuko YASUI

キーワード：わが家、離脱、所属、勇者

概要

ヘミングウェイの作品には「わが家」のイメージが希薄である。最初の短編集は、人間関係の面で居心地の悪い家庭や、戦争で破壊された家を描く。ヘミングウェイはいわば家の否定から出発している。三つの代表作においても、主人公は主として下宿、別荘、ホテルを住処とし、あるいは戦場を終の棲み家として勇敢な死を遂げる。初めてわが家らしい家を舞台とする未刊の原稿では、主人公はキューバ島の堅牢な家で一人暮らしており、その家は画家としての仕事場、自己防御の家、幸福の表層を一枚めくれば孤独の家である。評価の高い『老人と海』においても、老人は粗末な小屋に一人住む。だが周りの住人の心遣いが、彼の孤独を温かく包んでいる。しかしヘミングウェイの自殺は、この作品に垣間見られるコスモロジカルなわが家の温もりを、実生活に見いだし得なかったことを示している。

はじめに

今年（1999年）はヘミングウェイ生誕百年である。行動的、野性的で極めてアメリカ的な作家と言われ、生存中は英雄視さえされたが、意外にも小説の舞台は殆ど外国で、「アメリカを描かなかったアメリカ作家」とも呼ばれる¹⁾。自国ばかりか生家や故郷も描かれておらず、彼の作品には“わが家”のイメージが希薄である。この“家”の欠如はどこからくるのか、ヘミングウェイにとって“家”とは何であるのかを、主要作品を通して探ってみることにする。

1. 破壊された“家”

最初の短編集『我らの時代に』の舞台を見てみよう²⁾。これは十五の短いスケッチと十五の短編が交互に組合わされた構成となっている。短編の主要なテーマを挙げると、次のとおりである。

1. 「インディアン部落」…… インディアン女性の難産、

(平成11年9月9日受理)

川崎医療短期大学 一般教養

Department of General Education, Kawasaki College of Allied Health Professions

帝王切開、夫の惨い自殺

2. 「医者と医者妻」…… 相性の悪い夫婦
3. 「事の終わり」…… 失恋と廃墟
4. 「三日間の嵐」…… 失恋の後、友人と語らう
5. 「ボクサー」…… 列車から突き落とされた青年が、失恋して狂ったボクサーに出会う
6. 「とても短い話」…… 失恋
7. 「兵士の家」…… 理解のない母親、違和感のある家で居場所のない青年
8. 「革命家」…… 内気な青年がスイスで投獄される
9. 「エリオット夫妻」…… 辛辣に戯画化された、空虚な夫婦
10. 「雨の中の猫」…… 家庭というものに憧れる寂しい妻と無理解な夫
11. 「季節はずれ」…… 禁漁期に釣りをして法に触れるのを恐れる夫と不機嫌な妻、アル中のガイド
12. 「果てしない雪」…… ヨーロッパで友人とスキーを心底楽しみ、アメリカの家に帰ることを束縛と感じる青年
13. 「僕の親父」…… 少年の父は騎手で、事故死する
- 14・15. 「大きな二つの心臓の川」…… 自然の中で一人釣りをする青年

一見してわかるように、描かれるのは、失恋、うまくいかない夫婦、居心地の悪い家ばかりであって、わが身を守ってくれる、安心できる場所としての家は一戸だに見当たらない。その上、主人公の住まいの多くはホテル、別荘、下宿屋である。彼らが安堵と幸福を感じるのは家ではなく、雪山や川などの自然の中である。

スケッチの方は、前半七章が戦争を舞台とし、真ん中に街頭場面を挟んで、後半六章が闘牛に関するもの、最後の章が囚人の絞首刑を描く。その内容は、1、2が退却と逃避行、3、4が敵を射撃する場面、5から8は銃殺、負傷、砲撃、など撃たれる場面、9から14が闘牛の奮闘、傷つく馬、失敗、名闘牛士の技、その死となっている。「逃げる、撃つ、撃たれる、闘う、死ぬ」がテーマである。その描写に出てくる家といえ、バリケードに使われる、立派な家から取って来た玄関の鉄格子や、六人の男が銃殺される病院の中庭、背中を撃たれた青年がもたれる教会の壁、そこから見える壊れた家、つまり破壊され、荒廃した家屋の残骸ばかりである。この短編集が伝えるのは、人間は逃げるか、戦うか、やられるか、挫けずにしかし最後は死ぬかのいずれかであり、世界は自分に敵対するものだけということ。「家」というものは居心地が悪い所で、結婚や家庭は自由を束縛するということである。スケッチに見られる家屋の残骸は、作者にとって「家」が既に破壊され尽くしていることを示している。

ヘミングウェイを一躍有名にした『日はまた昇る』においても状況は変わらない³⁾。主人公のジェイクはヨーロッパに住むアメリカ青年。戦争の負傷から不能となり、相思相愛の英国女性ブレットと不毛な恋に苦しむ。性的に不能であることは、愛する女性と結ばれない不幸であり、同時に女性と真っ向から係わるしがらみから自由であることでもある。そのために彼はある種の detachment (距離、公平さ) を備えて周りの人間模様を見つめることができる。友人と旅行して釣りを楽しみ、仲間と闘牛を見物し、実らぬ恋に苦悩するが、少なくともその身の自由は保証されている。「勘定書はいつも来る。……おれはあらゆるものに支払いをしてきた」と言う彼は、無自覚ではあるが、不能という不幸によって支払いをしたので何のやましさもなく自由を享受できる。その自由は裏返せば孤独であるのだが、彼の住まいはやはり下宿やホテルであり、もともと希望のない恋を筋立てとする小説に「家」の出る幕はない。

2. 幻想の“わが家”

二十代に出版された前記の二作は、若者らしく家からの離脱と彷徨をテーマとしており、家庭が登場しないのは当然ともいえよう。しかし三十歳で出されたベストセラー『武器よさらば』は、反戦と熱烈な恋を描く以上、「わが家」が出て来てよいはずである⁴⁾。事実、戦争を嫌悪する兵士たちは「敗北とは何だ？ 家に帰るってことさ」(46)とか、「戦争は終わった。俺たちは家に帰るんだ」「みんな家に帰るんだ。平和万歳！」(196)と言う。しかし主人公フレデリックの行動を辿ってみると、彼は軍務についているときは軍が使用するイタリアの立派な邸宅、負傷すると軍の病院、恋人といるときはホテルか山荘に滞在し、彼の“わが家”は登場しない。

前線に戻る前日、彼は恋人キャサリンとミラノのホテルに宿泊し、「その部屋は僕たちの家(our own home)のような感じがした。病院の僕の部屋も僕たちの家だったが、この部屋も同じように僕たちの家だった」(139)と言う。別れるとき「僕たちのすてきな家(our fine house)を去りたくない。でも行かなくては」と彼は言い、キャサリンは「あなたが帰るときにはあなたのためにすてきな家(a fine home)を用意しておくわ」(140)と答える。前線の混乱で無意味に銃殺される所を間一髪で脱走した彼は、キャサリンと再会してストレーザのホテルに入ると、「僕たちは家に帰ってきた。もうひとりぼっちとは感じなかった」と幸福感に浸る。しかし愚劣な戦争と手を切って「単独講和」をしたにもかかわらず、脱走のやましさを打ち消すことはできない。

逮捕される寸前、嵐の中をイタリアからスイスに逃走し、山荘を借りて、身ごもっているキャサリンと彼は二人きりの幸せな生活を送る。しかし「昔はすることがたくさんあったが、今は君と一緒にいてくれないと何もないんだ」というフレデリック、「あなたと同じようになりたい、あなたになりたい」というキャサリンの言葉に伺えるように、互いに相手しかいない二人の閉鎖的な世界には、不吉な虚ろさの影がある。やがて出産のため病院に入ると思わぬ難産で、キャサリンは帝王切開を受けるが赤ん坊は死産、彼女自身も出血多量で息を引き取る。戦争する社会を拒否しても、フレデリックは幸せな“わが家”を築くことはできなかった。この小説を通じ彼の住居は、軍に配属された建物か、キャサリンと暮らすホテルや山荘であり、一貫して他から提供される住まいである。しかも入用な金

は、一覽私為替手形を振り出すと祖父が「祖国の勇士」である彼に送ってくれていた(68)。フレデリックが恋人とともに“our own home” “happy”と感じる仮の家は、実は経済的にも家事やまかないの上でも、常に他者によって維持されていたのである。

三十四歳頃のサファリの体験を描いた『アフリカの緑の丘』で、愛するアフリカにいるときヘミングウェイはこう書いている⁹⁾。「今私がしたいことといえば、アフリカに戻ることにだった。私たちはまだアフリカを去っていなかったが、夜目覚めたときなど、私は横になって耳を澄まし、すでにアフリカにホームシックな感情を懐いたものだ」「今、アフリカにいて、私はさらにアフリカを渴望した」(53)。アフリカにいながらアフリカを渴望する—それはそこが“わが家”ではなく、いずれそこを去らねばならぬことがわかっているからだ。彼は感覚的心情的に強烈に引かれるアフリカを“at home”と感じたが、生活面では無論そこに所属していなかった。フロリダ最南端のキー・ウェストに居を定めつつ、心はスペインやアフリカにある彼の“わが家”は、本当のところどこにも特定できなかつたであろう。

3. “家”を捨てた勇者

同じくアフリカの体験から取った有名な短編「キリマンジャロの雪」の冒頭に、キリマンジャロは「アフリカで最も高い山…その西の頂はマサイ語で“神の家”と呼ばれ、そのそばに乾いて凍りついた豹の屍がある」と説明されている¹⁰⁾。不注意な怪我から壞疽を起こし、死に瀕している主人公の作家ハリーは、自分の才能を売って「安全、快適、いい女と引き換えにした」ことを痛切に後悔する。この「安全、快適、いい女」という個人主義的満足感が、これまでの作品における“わが家”の属性であったことは間違いない。しかし、金持ちの妻が提供してくれた豪華な家と生活は、死を目前にしたハリーにとって何の意味もなかった。彼は自己の才能を、傑作を書くという本来の方向に発揮すべきであったのだ。死んでいく彼が見た光景は、「大きく、高く、陽光に輝く信じがたいほどに白い」キリマンジャロの威容だった。彼の願望は世俗の安逸の“家”から遠く離れ、雪の高峰“神の家”で永遠の豹に、不滅の作家になることではなかつたのか。

その四年後、四十一歳のとき、著作の中で最もよく売れた『誰がために鐘は鳴る』が出版された¹¹⁾。スペイン内乱を題材にし、激しい戦闘と恋の三日間を描くこの作品には、完全に“家”が欠落している。戦場に

って思い出すわが家に対する懐かしい思いを、家族を殺された人々は振り切って戦いに赴く。派遣されたアメリカ青年ロバートとスペインの共和主義の人々が暮らすのは山の洞窟である。暖かく、むっとして食べ物と汗の匂いの立ち込める洞窟の中に比べ、外気は松露、清流の香りが清々しい。夜は非常に寒く雪さえ降るが、ロバートは毎夜戸外で自分の上等の寝具に寝る。恋するマリアと結ばれるのも常に外の自然の中だ。

いよいよ橋梁爆破の戦闘に出掛けるためマリアと別れの挨拶をするとき、彼は初めて家を離れて学校に行くために、父に見送られて汽車に乗ったときの気持ちを思い出す。そのとき彼は内心こわかったが、別離に耐えられず目を潤ませている父に当惑して、急にならぬと年上であるような感じがして、父を気の毒に思い、恐怖心は失せてしまったのだった。自殺をした臆病者として密かに恥じていた父を、そして子供として属していた“家”を背後に残し、彼は勇者への道を進む。最終的にロバートは困難な任務を立派に遂行し、砲撃で致命的な傷を受けるが、南北戦争の勇士であった祖父に負けない立派な一生が送れたと、晴れ晴れとして戦場で死を迎える。キリマンジャロの雪の中の豹のように、不変の勇者として。

余りにも英雄的に描かれたロバートは、こうして勇敢な死を遂げる。しかしそれは生身の人間がたやすくできることではない。勇者たらんとしてロバートが否定した「家に帰りたい」という自然な感情は、兵士の一人アンドレスを通して書かれている。戦闘前夜突然司令部まで派遣されることになったアンドレスは、勇気も力も備えた青年だが、そのとき「救われたような安堵感」を覚える。戦争さえなければ狩猟をしたり釣りをしたり、ささやかな平凡な暮らしがしたいと彼は思う。だが今は「家もない、中庭もない……家族もない」、だからファシストと戦っているんだと「高尚な思索」をするが、それでも戦闘からはずされて救われたような安堵の気持ちは湧き上がってくる。普通の暮らしと家を求めるアンドレスの気持ちは、読む者にひしひしと伝わってきて共感を誘い、ヘミングウェイが心の奥では決して“家”を捨て去ったわけではないことがうかがわれる。ほっとできる場所、安心できる場所を必要としない人間はいまい。

4. 孤独の“家”

「家は港と外海の境目、細長く突き出した岬の一番高いところに建っていた。それは三度のハリケーンに

耐え、船のように堅牢に建てられていた。」『海流の中の島々』の冒頭の文である⁷⁾。四十代後半から執筆されたこの未刊の原稿に、初めて現実の“わが家”らしい家が現れる。キューバ島に建てられた白い立派な家である。「嵐を乗り切るためにそこに建てられ」「全部の窓から海が見え、縦横に風が吹き抜ける」「船のような」家だった。大きな暖炉があって冬でも暖かく快適で、主人公ハドソンはその家を船と同じく she (女性) として考え、わが家を見ると幸福を感じた。世界狭しと「動き回るのが嫌になり」「島に身を落ち着けて」自分の家をもった主人公がここに初めて登場する。

この“わが家”にハドソンは一人で暮らし、画家として仕事に勤しんでいる。二度の離婚の結果、三人の息子たちはそれぞれの母と住み、休暇には父と過ごすために島にやってくる。成功し有名となった彼は、ほとんどすべてのものを絵画の仕事と、整然とした仕事中心の生活によって置き換え、「何か持ちこたえるもの、彼を支えるものを作り得たと思った」。それは満足できる一人暮らしの生活だった。しかし愛する子供たちがやってくると「彼が築き上げた自己防御的な日課」は打ち砕かれる。息子たちと一緒にいると彼はこの上なく幸せだが、同時に、彼らが去ると孤独がすぐ始まることを痛感させられる。仕事のための「規則」や「習慣」や予定の時間表も、結局「孤独な人々が自分を救うための工夫」であり「すべて孤独を処理するためのもの」であった。

ここには子供に対する父親としての愛情が素直に描かれていて、読者の胸を打つ。子供が去るときの彼の深い寂寥感も否応無く伝わってくる。だからこそその守りは幾重にも堅く、痛ましさを感ぜさせる。自分で決めた時間を厳守して絵を描きながら「ここで仕事の手を休めてしまったら、自己防御のために築き上げた殻(carapace)が破られる……自分のために仕事で築き上げた安全(security)を失ってしまう」、だから仕事のために習慣を守ろうとする。「人生が仕事のうえに堅固に築き上げられた」彼の“家”は、つまるところ仕事のための場所だった。その“家”は carapace(殻、甲羅)であり、一個体の住処であっても家族の住処ではなかった。彼は自分の殻の中で、仕事という自分一人の力量によって懸命に世界に對峙していたのである。

子供達が訪ねてくる幸福や地道な仕事の価値も、いわば薄板一枚の上の安定で、その下に底知れぬ孤独と恐怖があるかのような不気味さを、この作品は潜ませている。ハドソンの馴染みの酒場の主人は彼に絵を描

いてくれと頼むが、そのテーマは恐ろしい竜巻、すさまじいハリケーン、タイタニック号の沈没、この世の終わりと、まるで世界の本質は破局であるかのようだ。ハドソンは“わが家”という殻で一人頑張り続けることに、いずれ終止符を打ちたいと意識下で願っていたのではなからうか。実際二人の息子の交通事故による死亡、長男の戦死という形で破局は現出する。「息子は亡くする。愛は失う。残るは義務のみ」と、生きる喜びをなくした彼を、作者は洋上の戦闘で負傷させて死に導く。

彼の“わが家”はつまるところ孤独の家である。一方で彼が心底から愛した海や魚など自然界においては、彼は孤独を忘れるひとときをもった。釣で大魚を相手にしてその魚を愛するあまり、自分と魚と「どっちがどっかわからなくなった」息子の気持ちを、自然と一体化する忘我の状態を、彼はよく理解できた。冒頭に描かれる彼の家が「港と外海の間」の岬にあることを思い出していただきたい。それは居ながらにして風を感じ、床に波のうねる響きを感じられる家、つまり人間界と愛する自然との間に身を置くべく彼が妥協した地点なのだ。しかし孤軍奮闘する意欲を失ったとき、家ではなく船の中で死を迎える彼は、やはり心の“わが家”をもっていたとはいえない。

5. “わが家”の温もり

『老人と海』は、ノーベル賞受賞のきっかけとなったヘミングウェイの最後の作品と言ってよい⁸⁾。主人公の老人サンチャゴは、老いても希望と自信をもち、強くて優れた漁師として登場する。しかしもう三カ月近く不漁が続き、少年マノリンに島の食堂「テラス」でビールを御馳走になる場面から物語は始まる。一人暮らしの彼の“家”は質素な小屋で、ベッド、テーブル、椅子がそれぞれ一つずつ、それに炊事のあるのみ。必要最小限のもの以外すべて削ぎ落とした所は、ソローのウォルデンの小屋を思わせる。彼は気遣う少年に「食べ物はある。それに別にほしくはない」と言うが、実は小屋には何も無い。少年の配慮で「テラス」の主人が彼に食事をおごってくれる。翌朝、たまり場で朝のコーヒーをもらい、船出のときは一瓶の水だけをもっていく。もはや食べることには興味がなく、漁のために必要だから食べるだけとはいえ、食物は周りから与えられるのである。

翌朝、今日こそ運をつかもうと老人は遠く沖へ(far out)出て行く。見たこともないほど巨大なメカジキが

かかり、彼はたった一人勇敢に巧みに忍耐強く闘って、ついに魚を仕留める。しかし帰途に幾度もサメに襲われ、力の限り戦うがメカジキはサメに食い尽くされてしまう。洋上の迫力ある奮戦とその勝利を、老人は決して家に持ち帰ることができない。彼にとって「海」と「家」とは対極的な関係にあるからだ。海こそ躍動と男の誇りと生きている実感の場であり、老いて一人暮らす家は単に休息し、食べ、寝る所、海に行くために身を置く場所にすぎない。両者は決して統合されず、海の誇りを家に持ち帰ろうとするとそれは骨だけの残骸と化してしまう。

こうした“家”の存在の薄さは、海上の鳥たちに対する彼の思いにもうかがわれる。「いつも飛んで探しているが殆ど何も見つけることのない、小さな繊細なアジサシを気の毒に感じ」、「海がこんなに残酷なときもあるのに、なぜ鳥をこれほど繊細にか細くしたんだろう」と彼は訝る。この繊細な鳥は「挫けない強い男」の裏面、作者のもう一人の自己ではあるまいか。疲れ果てた小さな鳥が飛んで来て釣糸に止まると、老人は「年はいくつだね?」と呼びかけ、「その釣糸はしっかりしてるよ。……ゆっくり休むといい。……よかったらわしの家にいるがいい」(47)と話しかける。長年戦い続けて疲れた老人もまた、心身ともにゆっくりできる終局の“わが家”を探していたのではあるまいか。

老人は失意のうちに家に帰り、眠りに落ちる。しかしそれをわびしさや絶望の物語にしないものがこの作品にはある。それは彼の勇気や忍耐力だけではなく、むしろ老人の世話を見る少年をはじめ老人の周りの人々の存在である。何度か食事をくれた親切な食堂の主人や、老人に思いやりを示す町の人々には暖かい情が感じられる。だから思わぬ遠出となったとき、老人は「少年は心配しているだろう、年とった漁師の多くも心配するだろう。ほかのたくさんのやつも、わしはいい町に住んでいる」と言えるのである。事実、傷ついて帰り眠る老人を見た少年は泣き、漁師仲間は気遣い、「テラス」の店主は「ほんとに残念だったなと伝えてくれ」と少年にコーヒーをことづける。「話し相手がいるということは何と快いことだろう」と思う老人に、少年は「今度はまた一緒に漁に行こう」ときっぱり言う。

老人のライオンの夢や「偉大なディマジオ」への愛着に見られるように彼はまだ強さを残してはいるが、結局のところ老いは否定できない。船の中で少年の助けがあればと何度となく呟き、「年老いて一人いるべき

ではない」と彼は言う。いかに強くても人間は一人では生きられないということをその言葉が痛感させるのは、気丈な彼が老いの身で孤独と奮闘の限界まで行って帰ってきたからだ。見事な大魚を骨にされ「やられてしまった。だが何のせいでもない、わしが遠出しすぎただけだ」という老人は毅然とした気性を失っておらず、「老人はライオンの夢を見ていた」という文で作品は結ばれている。しかしライオンの夢を見る老人は「傍らの少年に見守られている」のだ。彼の住む町の人々には適度の距離をおいた温もりがある。彼個人の家はいかに乏しくとも、彼の“わが家”は非常に希薄ではあるが周りに広がっている。

終わりに

破壊された“家”、否定された“わが家”とともに登場したヘミングウェイの主人公は、自分の家をもたないまま、フランス、イタリア、スイス、アフリカ、スペインと動き回った。やがてキューバに堅牢な建物の“わが家”が築かれるが、それは主人公ただ一人の“家”だった。『海流の中の島々』はその孤独という面を描き、『老人と海』は一人ではあってもその背後にある土地の人々とのつながりを暗示している。もし健康を蝕まれて創作力を失わなかったとしたら、ヘミングウェイはもっとコスモロジカルな“わが家”に近づいたかもしれない。最後に住んだアイダホの家で、彼が家族の目を盗んで猟銃自殺したのは、ごく小さな小部屋だったという。力一杯戦い、幸も不幸も味わい尽くした彼の冥福を祈る。

文 献

- 1) 今村楯夫、和田悟：ヘミングウェイを追って、東京、求龍堂、1995
- 2) Hemingway E: The First Forty-Nine Stories, London, Arrow Books, 1993
- 3) Hemingway E: The Sun Also Rises, London, Arrow Books, 1994
- 4) Hemingway E: A Farewell to Arms, London, Arrow Books, 1994
- 5) Hemingway E: Green Hills of Africa, London, Arrow Books, 1994
- 6) Hemingway E: For Whom the Bell Tolls, London, Arrow Books, 1994
- 7) Hemingway E: Islands in the Stream, New York, Simon & Schuster, 1997
- 8) Hemingway E: The Old Man and the Sea, Middlesex, Penguin Books, 1966

